



戦国期拠点城郭

国史跡 清水山城館跡

しみずやま じょうかん あと

清水山城館跡は、饗庭野の南東部の「清水山」と呼ばれた山の上に築かれた戦国時代の山城です。戦国時代の山城は、戦いの時にたてこもる「とりで」のようなものと思われがちですが、清水山城の場合、「政治」「軍事」「居住」の機能が、山城に集中する「戦国期拠点城郭」に位置づけられています。

鎌倉時代から戦国時代末にかけて、高島郡では、近江源氏佐々木氏の一族が活躍しました。嘉禄元年（1235）に佐々木高信が、田中郷の地頭になります。それ以降、一族の越中氏・能登氏・朽木氏・永田氏・横山氏・田中氏・山崎氏は、「西佐々木七人」「七頭」「高島河上七頭」「七佐々木」と呼ばれ、強く結びついていました。この西佐々木一族の惣領家（本家）である佐々木越中氏が、清水山城の城主と伝えられています。

「清水山」のふもとには、南北に西近江路が縦断しています。この主要道に面して、北から清水山城の城下とされる「今市」・「平井」・「安養寺」・「川原市」の集落が営まれていて、城下町が成立する過程を知る上で注目されています。登城路（大手道）は平井集落から分岐し、西に伸びていました。城の遺構は、新旭森林スポーツ公園の西の段丘上から残っています。



主郭 礎石建物跡

段丘上の「御屋敷」・「犬馬場」の地名が残るエリアは、清水山城主である佐々木越中氏の館の跡、流鏑馬の練習の「犬追物」の行事をする場と考えられています。大手道は、この「御屋敷」・「犬馬場」の脇をとり、さらに北西の山に続きます。山腹の「西屋敷」・「東屋敷」の地名が残るエリアは、天台寺院清水寺の坊跡を利用した一族や家来の屋敷跡と考えられています。土を盛った土手（土塁）によって、方形に区画されていて、その中に井戸跡を見ることが出来ます。この屋敷跡と西ノ谷川をはさんだ西側にも、大法（玉）寺と呼ばれる寺跡を屋敷にしたとされる本堂合遺

編集後記

先日ラジオで「現実的な確率」が話題に出ていました。それによると、一生のうちで犯罪被害者になるオッズは20：1、自分の子どもが天才のオッズは250：1、パートナーに浮気されるオッズは4：1で、今日UFOを見るオッズは3百万：1、隕石が自分の家に当たるオッズとなると182兆1,388億8千万：1になるとか。日本での確率とは異なるそうですが、人生の巡り合わせを数字に置き換えてみると何とも興味深いですね。些細な出来事も、実は「偶然が重なり合って生まれた奇跡」との出会い。そう思うと、なんだか少し幸せな気分になります。普段の生活で、大きな幸せにはなかなか巡り会えませんが、小さな幸せを感じ積み重ねて行くと、意外にそこへつながる近道となるのかもしれない。（広報担当〇）

跡（井ノ口館）があり、「西屋敷」・「東屋敷」と同様の遺構が残っています。また、隣接して佐々木氏の氏神をまつる大荒比古神社が鎮座します。大手道は西屋敷の中央をとり、山城に続きます。山城は標高約210mの主郭（山城の中心地）を中心として、三方の尾根上に築かれています。ここからのながめは大変よく、西佐々木一族が活躍した高島市中部南部一帯だけでなく、条件が良ければ、琵琶湖対岸まで見渡すことができます。主郭では、平成8年度の発掘調査によって、常御殿と考えられる礎石建物跡が見つかっています。出土した土器から清水山城は、織田信長が高島郡を攻略する1570年頃まで存続していたと考えられています。また、主郭には、近江（滋賀県）では、あまり見ることができない畝状空堀群が築かれています。信長との攻防にあたり、越前朝倉氏によって改修された可能性が推測されています。これらの遺構の中で、山城と屋敷跡の範囲、約46haが、日本史を語る上で重要な遺跡として、平成16年2月27日に国の史跡



主郭 礎石建物跡 復元画

に指定されています。現在、清水山城は、みどり豊かな山の中にあります。春には、黄色のマンサク、ピンク色のミツバツツジ、白色のタムシバ、赤色のヤブツバキなどきれいな花を見ることが出来ます。ぜひ、ハイキングに清水山城に登ってみられてはいかがでしょうか。（文化財課）



磯野員昌と新庄城



新庄城跡の中心部を取り囲む土塁（土手）。大善寺周辺に残る。

新旭町新庄に所在する新庄城は、天正元（1573）年7月の織田信長の高島郡攻略後、磯野員昌が高島郡の支配の拠点とした城郭です。員昌は浅井長政につかえ、六角氏に対して最前線となる佐和山城の城主でした。元龜元（1570）年6月の姉川の合戦では、浅井軍の先鋒として出陣し、織田軍の十三段の備えのうち、十一段まで撃破する猛攻は、「員昌の姉川十一段崩し」の逸話として残っています。

姉川の合戦後、包囲された佐和山城に7か月間籠城しましたが、やむなく信長に降りました。員昌と籠城兵は、船で高島まで移送されました。信長は員昌に対し、高島郡内の支配を命じます。この時の拠点となった城が新庄城です。

員昌は、善積荘と木津荘の境界争いの裁定など、郡内の民政にあたるほか、元龜元年5月に千草越を通過していた信長を鉄砲で狙撃し、逃亡していた杉谷善住坊を、天正元年9月に高島郡堀川村の阿弥陀寺で捕らえ、岐阜に送っています。

天正年間（1574）の初めに、信長の甥の織田（津田）信澄を養子にし、天正4（1576）年には「今津より北」を員昌が、「今津より南」は、信澄が統治したとされています。

新庄城は、佐々木越中氏が城主であった清水山城の出城と伝えられ、戦国時代には浅見氏や多胡氏が城主であったと伝えられています。

員昌が在城していた新庄城について、明治時代の新庄村の絵図には、大善寺の東・西・北の3方に土塁（土手）や堀の痕跡と考えられる「コの字」に囲む土地割が見られ、現在も土塁が残っています。この囲まれた

空間が、新庄城の中心部と推定されています。

この方形の区画を中心として、「西手」「東町」の小さな名が残るまでの間と、「二ノ丸」「三ノ丸」の地名が残るエリアが、新庄城の範囲とされています。

国道161号線バイパスに伴う「二ノ丸」「城ノ内」の発掘調査では、堀や土塁、石敷、井戸などが発見され、城下であった可能性が推測されました。

また、大善寺の北側の東西に伸びる道沿いには、新庄城下の町場、東側の南北に伸びる道沿いには、武家屋敷があったことが想定され、員昌によって城下町整備計画がすすめられたと推測されています。

しかし、員昌は天正6（1578）年2月、信長の怒りをつかたため、高野山に入りました。

信長は、信澄を高島郡の一郡支配を命じ、高島郡支配の拠点も新庄城から大溝城に移ります。大溝城下町の建設にあたり、新庄城下から町場の移転も行われました。

（文化財課）

編集者のつぶやき

今回の表紙は、箱館山で行われたマウンテンバイク大会のダウンヒルレースの様子です。選手の皆さんは、でこぼこ斜面のコースを山の上から勢いよく自転車を走らせておられ、その迫力に圧倒されました。中には転倒する選手もおられますが、すぐに立ち上がり全力疾走。その姿勢は、ぜひ見習いたいものです。

（広報担当S）



かつて、1町（100m）四方の規模があり、杉谷善住坊が捕らえられた阿弥陀寺。その四隅に設置されていた結界石が境内地に残る。



海津衆 田屋氏と 江北 浅井氏

戦国時代に高島郡で活躍した海津衆（饗庭・田屋・新保）の中で、田屋氏は、江北 浅井氏と縁戚関係で強く結ばれていました。浅井亮政は、田屋氏の子とされる明政を養子にし、娘（鶴千代／海津殿）の婿にむかえました。以後、田屋氏は、浅井氏の高島郡進出に大きな役割を果たします。この田屋氏の館の跡とされるの



▲田屋城口ノ丸からの眺望 海津・琵琶湖・竹生島が一望できる



▲田屋氏の居館跡とされる長法寺



▲田屋氏・浅井氏ゆかりの宗正寺

が、マキノ町沢にある長法寺で、背後にあたる森西集落の「城山」と呼ばれる標高約320mの丘の上には、田屋城跡があります。ここからは、北陸道と知内川に沿って若狭にいたる街道を見下ろすことができるとともに、海津や琵琶湖を一望できます。

この田屋城からは、浅井・朝倉氏の城に共通する築城技術が、駆使されていることをうかがい知ることができます。

乳母および侍女となり、淀殿の名代としても活躍します。

慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦いの際には、長政の二女初（常高院）のいる大津城の開城につかわされました。また、慶長19年（1614年）、方広寺の鐘銘の弁明にも、駿府の徳川家康のもとにもわいています。

そして、大坂冬の陣の講和の時には、家康のもとに、常高院とともに使者に立ちましたが、元和元年（1615年）の大坂城落城の際に、淀君・秀頼とともに自刃しました。

マキノ町海津の宗正寺には、海津政元（浅井明政か？）夫妻や、饗庭局の位牌などが伝えられていて、浅井氏や田屋氏の関わりが深い寺として知られています。（文化財課）

また、羽柴秀吉と柴田勝家の賤ヶ岳合戦の際には、秀吉方の丹羽長秀が海津の防備を固めていて、その時に改修されたことも指摘されています。

さて、浅井明政の子について、長女（海津局）は、茶々（淀殿）の侍女となり、大坂落城の時に、千姫とともに逃れ、のちに浅井長政の三女（江源院／達子）と千姫に侍女として仕えました。

二女である饗庭局もまた、淀殿の

編集者のつぶやき

秋といえば、スポーツの秋。ということで、表紙にはマキノで行われた「2010びわ湖高島マラソン」のスタートの様子をパシャリ。メタセコイヤの美しい並木道を、たくさんの選手が一斉に駆け出す瞬間は迫力満点。完走後は皆さん爽やかな笑顔に。スポーツ以外にも、秋には、文化祭や産業フェア、市民劇など催し物もたくさんありますので、ぜひ満喫してみてください。（広報担当S）

大溝城フォーラムⅡ

大溝城の 歴史的変遷を 考える

▼日 時 3月13日(日)
13時～17時

▼場 所 ガリバーホール

▼内 容

○報 告

「分部家文書の紹介」

藤井 譲治 氏

(京都大学大学院文学研究科 教授)
(大溝地域周辺調査委員会 委員長)

○講 演Ⅰ

「大溝城と織豊期の水城
～琵琶湖岸の城郭と内湖をめぐって～」

佐野 静代 氏

(同志社大学文学部 准教授)

(大溝地域周辺調査委員会 委員)

○講 演Ⅱ

「織田・豊臣時代の大溝城」

中井 均 氏

(NPO法人城郭遺産による街づくり協議会 理事長)

○公開討論会

「大溝城の歴史的変遷を考える」

・司 会

金田 章裕 氏

(大学共同利用機関法人

人間文化研究機構 機構長)

(大溝城周辺水辺景観保全検討委員会 委員長)

・パネリスト

藤井 譲治 氏・中井 均 氏

佐野 静代 氏・白井 忠雄 (高島
歴史民俗資料館 参事)

▼定 員 300人(先着順)

▼参加費 500円(資料代込)

▼受 付 2月7日(月)から

▼申込方法 電話・ファックス・メール

問・申 文化財課

☎(32) 4467

FAX (32) 3568

✉bunkazai@city.

takashima.shiga.jp

拡大版

拡大版・市長の手帳

タフ・トビックス

子育て

安心安全

消費生活 省エネ

みんな 575

健康生活

元気生活

教育委員会

びょういん だより

国保年金

暮らしの情報

図書館

窓口だより

歴史散歩



▲総門(市指定文化財)

今回のフォーラムは、織田信澄が築いた大溝城や、分部氏が構えた陣屋などにスポットを当て、地域の魅力を掘り起こしながら大溝地域の歴史的変遷を考えます。

大溝城は、天下統一を目指す織田信長が安土に居城を構えたとき、その対岸にあたる高島郡支配の拠点として、天正6年(1578)に信長の甥である織田信澄によって築城されました。設計は、明智光秀と伝えられています。

信澄が築城した大溝城の全貌は、明らかではありませんが、現在、天守台跡と考えられる石垣が乙女ヶ池に隣接して残ることから、内湖を巧みに利用した水城であったと考えられ、琵琶湖の制海権の掌握を重要視して築城されたことが現在の姿からもうかがえます。

信澄の後、分部光信が大溝に移るまで、大溝城主は頻繁に交代します。そして、慶長8年(1603)に大溝城は取り壊され、その部材は水口岡山城に移されたと伝えられています。

元和5年(1619)に分部光信が伊勢上野から大溝に移り、大溝藩は廃藩置県まで約250年続きます。

光信は、初代大溝藩主として高島郡内に32か村、野洲郡内に5か村、約2万石を領有し、信澄が築いた大溝城三ノ丸付近に陣屋を構え、城下の整備を進めていきました。

現在「郭内」と呼ばれるところはかつての武家屋敷で、周囲に塀を巡らせ総門、西門、南門を設けました。そして、背戸川、総門を境として、総門より南は武家屋敷、総門より北は町人町として区別しました。

また、城下には、生活と防火に備えた用排水とする水路を配するなど城下の整備に力を入れました。城下には、「長刀町」・「伊勢町」・「江戸屋町」・「船入町」・「職人町」・「紺屋町」・「蛸畑町」等々の町名が今も残っています。

大溝藩主分部侯の菩提寺は圓光禅寺で、分部家の大溝への転封にあたり、伊勢上野から大溝に迎え

編集者のつぶやき

今号の特集にも取り上げた、大河ドラマ「江〜姫たちの戦国」がいよいよはじまりました。滋賀を舞台に描かれるお江の波乱の物語、毎週楽しみに見えています。市内では、大溝城が次女初の新婚生活を過ごした場所ともいわれゆかりの地とされています。残念ながら城は残っていませんが、石垣などの城跡や外堀だった乙女ヶ池があります。これを機会に、地元の歴史に触れてみてはいかがでしょうか。

(広報担当S)

大溝地域の歴史的変遷を考えながら、大溝地域の魅力を再発見してみませんか。ぜひフォーラムにご参加ください。(文化財課)

られました。以来、今日まで400年にわたり、分部家歴代の御廟を守っています。

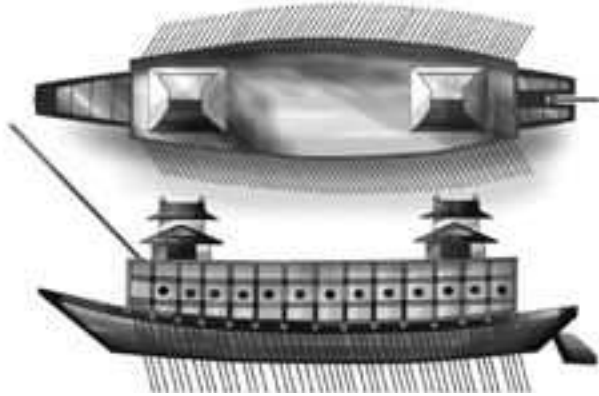


織田信長、

大船で高島を攻める

元龜4年（1573）5月22日、織田信長は、將軍足利義昭が戦備を整えているとの情報を得たため、彦根の佐和山城下の松原において、急遽、巨大な船の建造に取りかかります。

『信長公記』によると、信長は大船の建造にあたり、のちに安土城天



▲信長の大船（想像図）

主建設の大工頭を務める岡部又右衛門を棟梁に任命します。

船は「長さ30間（約60m）、幅7間（約14m）とし、艀を100挺備えさせ、艀（船尾）と舳（船首）に櫓（展望がきく背の高い建物）をつくり、堅固なつくり」にするよう又右衛門に命じました。そして、自らも昼夜を問わず、現場を監督しました。これにより船は同年7月5日に完成し、その大きさは多くの人々を驚かせました。

出来上がった大船は、現在、琵琶湖に浮かぶ船の中で、最も大きい「ビアンカ」が全長約66m・幅約12mなので、ほぼこれに匹敵する大きさです。

7月26日、信長はこの大船に乗って高島郡に出陣します。

現在、高島市内に残る田屋城、清水山城、田中城の中心地からは、琵琶湖を一望することができます。当時も大船で信長が攻めてくる様子が、これら

の城からもうかがえたことでしょう。

『信長公記』には、高島郡の攻撃の様子について「陸から木戸・田中西城を攻め、琵琶湖からも大船をつけ、信長直属の馬廻（騎馬の武士）によって攻めたため、城主は降参し、城を退いた。信長は木戸・田中西城を明智光秀に与えた」と記しています。

そして、信長は、高島郡内の浅井久政・長政の知行所（領地）に馬をすすめたのち、林与次左衛門（員清）の所（打下）に陣をおき、高島郡内に兵を放って放火させ、高島郡を攻略しました。

文献上に見られる大船の利用は二度限りで、天正4年（1576）に、信長は「大船入らず（＝不要）」とし、早舟10艘に造り替えられます。

理由として、義昭が没落したことや、近江の支配が安定し、この年に安土城の築城が始まっていることから、大船を軍事的に、そして威圧的に利用する

必要がなくなったことが考えられ、移動が目的の早舟に造り替えられたものと思われる。

信長にとって高島郡の攻略は、近江平定への大きな足がかりとなりました。約半月後に小谷から敗走する朝倉氏を、さらに半月後には浅井氏を小谷城に攻め滅ぼします。高島の佐々木一族は、織田信長との攻防の中で、いかに行動したのでしょうか。

10月29日（土）午後1時から開催するフォーラム『高島の佐々木七氏と清水山城』では、浅井・朝倉氏との関わりを交えつつ、佐々木一族の活躍をご報告いたします。皆さんぜひご参加ください。（フォーラムの詳細は、広報9月号をご覧ください。）

図文化財課 ☎（33）4467

編集者のつぶやき

▼9月に入り大型の台風が続き、日本各地に甚大な被害を与えました。自然の脅威を改めて感じさせられます。
▼表紙は、マキノ東小学校の自然教室のようす。5・6年生が2日間にわたり、カヌーで湖上往復約30kmを漕波しました。長い道のりを経てゴールした子どもたちは、達成感でいっぱいの顔に。自然や地域に触れ、友だちと協力することの大切さを学ばれました。（広報担当S）

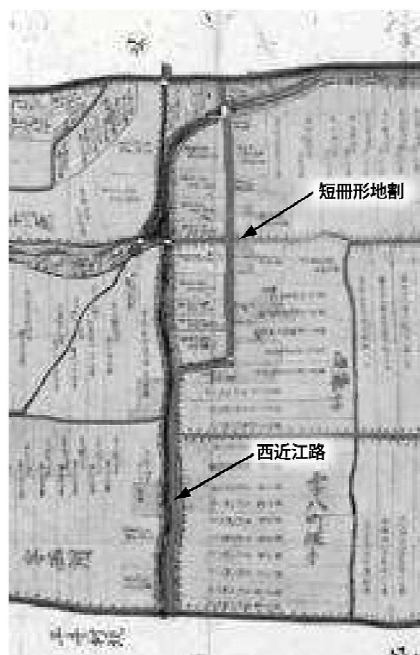
清水山城と城下

饗庭野の南東部に位置する清水山城は、全国的に貴重な遺跡として、山城・屋敷・館の範囲が国の史跡に指定されています。

城の南方には、湖西最大の河川であり、水運に重要視された安曇川が流れています。一方、山麓には、主要な道である西近江路が南北に縦断しています。

この西近江路に沿って清水山城下の集落が営まれていました。

まず、城下の一番北端に位置する集落が「今市」です。明治6年の



▲明治6年 今市村絵図

地籍図を見ると、道に面して間口の狭い「短冊形」の土地が連続してなり、市場の町なみを想像することができます。（左上写真）

「今市」は、その名称などから清水山城主 佐々木越中氏によって「新しくつくられた市」と考えられています。

のちに織田信澄（信長の甥）が築く大溝城下町には、新庄町・南市町・今市町の地名が見られ、城下町がつくられるにあたって、高島郡内の町場が移転されたことがうかがえます。

新庄町は新庄城下の町場、南市町は安曇川南岸の田中の町場、今市町は清水山城下の町場である「今市」と考えられています。

「今市」は戦国時代末に

は大溝城下町に招来されるほど発展した町場になっていたと推測されています。

「平井」は、今市の南に位置し、清水山城への大手道が西近江路と交錯する地点にあたります。地元には、佐々木越中氏の家臣であった八田氏が居住していたとする伝承が残っています。明治6年の地籍図には、西近江路と大手道に沿ってブロック型の土地が見られることから、武家屋敷群が存在したのではないかと推測されています。

平井の南に位置する「安養寺」の集落は、清水山屋敷地の「地藏谷」にあり、織田信長の高島郡攻略の時に、清水山から現在地に移転したと伝えられています。

「川原市」は、西近江路が安曇川を渡る地点の北側に位置し、すでに、応永34年（1427）に書かれた『宋雅道すがら之記』にその名が見られます。

集落にある妙敬寺は、佐々木氏の一族が建立したと伝えられ、境内には佐々木高信の墓と伝えられる五輪塔が残っています。また、七川祭における「神御供の式」では、佐々木氏おかかえの鍛冶の子孫とされる「河原市鍛冶」の岡田一族が正座します。（右下写真）これらのことから「川原市」は、鎌倉時代より佐々木氏と密接な関係にあり、佐々木氏直属の職人集団が存在したと考えられています。

編集者のつぶやき

暑かった夏も過ぎ去り、ぐっと涼しい秋になりました。秋には、スポーツの秋、食欲の秋、収穫の秋などいろいろな楽しみがありますね。皆さんどんな秋をお過ごしでしょうか。表紙には、「収穫の秋」ということで、さくら園の園児が、地元農家さんたちの指導のもと、芋ほりをしているようすをパシャリ。ちびっこたちは、大きなイモを収穫し、「重い～」と言いながらも



清水山城の城下は、国内の城下町のように形づくられていったか、の過程を知る上で、その初期段階の例として注目されています。

図文化財課 032)4467

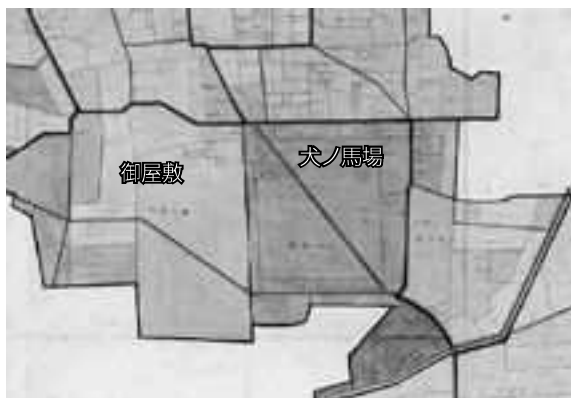


武芸の訓練の場 犬ノ馬場



新旭森林スポーツ公園の西方に広がる段丘上に、「御屋敷」と「犬ノ馬場」の地名が残っています。この地名から武士の生活の一端をうかがい知ることができます。

「御屋敷」は、清水山城の城主であった佐々木越中氏の館跡と考えられ、これに接して「犬ノ馬場」の地域が広がっています。



明治6年 安養寺村絵図

明治時代の村絵図には、「犬ノ馬場」の地名とともに、1町四方（約100m四方）の土地が見られ、地元の方々の話によると、かつて、この周囲には土塁（土を盛った土手）や堀を見ることができました。現在、この区画の北西の隅に、近江源氏佐々木氏の氏神少名彦命を祀る大將軍社が鎮座します。

鎌倉時代以降、武士は武芸の訓練として、馬に乗って矢を射る訓練をしました。幼少時代から、馬の腹をはさむ訓練を受けるため、大腿骨が湾曲していたともいわれています。

この騎射の訓練の一つに、馬場に犬を放って標的にする「犬追物」がありました。この犬追物を行った馬場が「犬ノ馬場」です。一般的に、馬場は領主の館の正面に作られました。ちなみに「犬ノ馬場」の地名は、高島市周辺では、越前朝倉氏の一乗合遺跡や近江守



大將軍社（本屋敷の鬼門に位置すると伝えられる）

護の六角氏の観音寺城の城下町の石寺に残っています。また、観音寺城の本丸建物の障壁画には、犬追物の絵が使われていたとされ、現存する模本（国会図書館蔵）から犬追物の様子を知ることができます。馬場には、高さ1尺8寸（54cm）の太い縄で囲まれた土俵があり、犬が縄を飛び越え、スピートが落ちる一瞬をねらいました。しかし、ここで失敗すると、標的の犬も、追う馬も疾走することになります。

手綱を放したまま馬と弓を操作することは、至難の技で、矢の数よりも落馬する数の方が多かったことが、当時の文書にも記されています。

編集者のつぶやき

表紙は、道の駅くつき新本陣で行われた東日本大震災復興祈念「つなごう・希望の灯り」のようす。復興を願うメッセージカードがついた約250個の風船が空に放たれました。またその後、夕方にはメッセージが書かれた300個の竹灯籠と高さ約3mの竹のモニュメントに火が灯されました。東日本大震災から1年が経過しました。被災地の復旧・復興には継続した支援が必要とされています。できることを続けていきましょう。（広報担当S）

閩文化財課

☎ (32) 4467

犬追物には、少なくとも150匹の犬が必要とされ、大規模な犬追物では千匹を使うことがあり、開催にあたり、多くのお金が必要とされました。一方、馬場には見物のため、はしごを使ってあがる棧敷が準備され、見物料（棧敷料）がとられました。

この棧敷料で経費が回収でき、興業収入も期待できたことから、武士は各地域に「犬ノ馬場」を設置し、頻繁に犬追物が開催されました。

犬追物の矢には、衝撃をやわらげる鐙矢が使われましたが、傷つくと犬も多かったとされています。

饗庭三坊と城

戦国時代の末になると、高島郡では「饗庭三坊」が有力土豪として台頭してきます。

永禄9年（1566）高島郡への影響力を強める浅井長政は、善積荘（現在の今津町南部）・河上荘（今津町北部）のほか、木津荘（新旭町北部）・保坂関の取り分の一部を、西林坊・定林坊・宝光坊にあてがっています。

饗庭三坊について、地元ではさまざまな呼び名や伝承が語り継が

れています。

『高島郡誌』には、「吉武吉岐守の長子が西林坊と号し日爪村に、次子が定林坊を号し霜降村に、季子（末子）が吉武吉岐守と称し、五十川村の吉武城にいた」と記されています。

この三つの坊は、他の文献史料からもその実在を確認することができることから、西林坊、定林坊、宝光坊が「饗庭三坊」であったと考えられます。

新旭町の南部では、清水山城や新庄城が築かれるのに対し、北部の木津荘の範囲には、日爪城や饗庭館、そして五十川城やその城下と考えられる吉武城が築かれています。

応永29年（1422）に作成された『木津荘検注帳』には、日爪城が位置する丘陵のふもとに「西林坊」の地名が、享禄2年（1529）の『饗庭又三郎売券』には「霜降定林坊」の名が記されています。

また、五十川村には「宝光坊」の地名や、吉武吉岐守との関係が推測できる「吉武」の名も見られ



日爪城からの眺望

ます。

吉武吉岐守については、天正10年（1582）織田信長の加賀一向一揆の討滅前後に、鳥越城（石川県白山市）の城主として、その名が見られるほか、慶長3年（1598）に村上頼勝が入城する村上天（新潟県村上市）の田口曲輪は、村上氏の筆頭家老であった吉武吉岐守とその家臣団「山衆」の居住地として「吉岐殿丸」とも呼ばれています。昭和61・62年の国道161号バイパス建設に先立ち実施された吉武城跡の発掘調査では、16世紀後

半の掘立柱建物跡や区画性のある堀跡などが見つかっています。

堀跡からは土器とともに阿弥陀石仏や一石五輪塔などの石造物が出土しています。これらには火をうけた痕跡が認められるとともに、多くの石材が投棄されたような状態で見つかっています。

元龜3年（1572）織田信長の命をうけた明智光秀は、「饗庭三坊の城下まで放火し、城を三箇所落とした」ことを書状に記しています。

発掘調査で見つかった吉武城跡の堀跡からの出土物は、落城や城の廃絶が推測できる資料として注目されます。

文化財課

☎(32) 4467

編集者のつぶやき

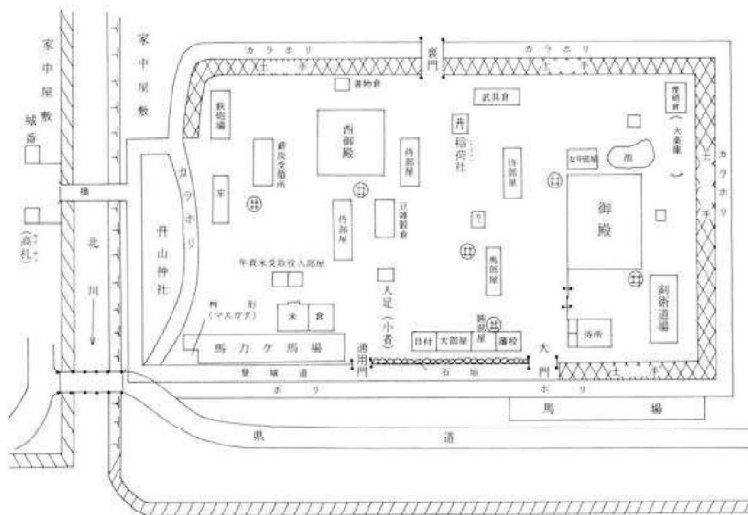
早くも今年最後の月になりましたね。12月というとクリスマス思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。現在、オレンジリボンキャンペーン（児童虐待防止の啓発活動）の一環として、市役所1階に大きなツリーを設置しています。来庁された時は、ぜひツリーをご覧いただき、子どもを思う気持ちなどをカードに書いてツリーに飾り付けてください。みんなで虐待防止について考えましょう。

（広報担当S）

朽木陣屋の御殿に付属する 土蔵・台所・馬屋

朽木陣屋は、江戸時代に旗本であつた朽木氏の屋敷で、高島市朽木野尻に所在していました。

この陣屋内の様子は、大正11年に作成された見取図から推測することができます。昭和58年度に行われた発掘調査では礎石建物跡が



大正11年 朽木陣屋見取図

発見され、25・706㎡の範囲が朽木陣屋跡として滋賀県の史跡に指定されました。

また、平成12年度の調査では、室町時代から機能していた堀・道・橋も見つかり、朽木氏の屋敷は、江戸時代末まで位置や規模をほとんど変えずに続いていたと考えられています。

平成20年度には、遺構の保存状況や内容を確認する目的で、陣屋中核部の発掘調査を実施しました。結果、土蔵と考えられる石列、台所や馬屋と考えられる礎石建物跡や石敷が見つかり、これらの建



土蔵 基礎 石列



馬屋と井戸

物跡は規則的に配置されていました。

土蔵は建物の基礎となる約40㎡の川原石が直線的にならび、その外側には礎敷があり、犬走りと考えられます。土蔵の規模は、この犬走りの長さから桁行8間(15・76m)以上と推測されます。[参考：1間＝6尺5寸＝約1・97m]

台所は、調査区の北面で見つかりました。この石敷の石は、上面をそろえ規則的に配置されていますが、熱を受けたために赤く変色し、割れていました。石の配置や広がりから、かまどと焼き物や煮物などの調理を行う長囲炉裏と考えられています。

一方、調査区の南面では馬屋が見つかりました。一般的に馬をつなぐところは、おおむね1頭につき、間口2・1～2・4m、奥行4m程度とされ、重い馬体を支

の中に礎敷が認められました。また、馬屋に属する井戸跡も見つかっています。

これらの遺構は、出土した土器から18世紀後半から19世紀前半に位置づけられ、陣屋の最終段階のものと思われます。

また、これらは御殿に付属する建物と考えられます。

見取図には、御殿の南面に馬屋が記されていることから、御殿は馬屋や台所の北方にあり、礎石などの遺構が残っている可能性が高いことが指摘されています。今後、適切な保存・活用が望まれる遺跡であるといえます。

図文化財課

☎(32)4467

編集者のつぶやき

ぽかぽか暖かくなり、春の訪れを実感しています。春になると、お花見などが楽しみです。

表紙は、昨年撮影した朽木の桜並木のような。開花に合わせ、今年も朽木鯖街道桜まつりが開催されます。(詳細はP 34 掲載) また、4月から5月にかけて、市内では、川上祭や海津力士祭、七川祭、大溝祭などなど特色ある数々の地域の祭りが催されます。春の陽気に誘われてお出かけしてみたいかがでしょうか。(広報担当S)



広報たかしま

平成25年

4

月号

No.159

発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒500-1001 滋賀県高島市新旭町北畑65番地

☎0740(25)8000(代)
http://www.city.takashima.shiga.jp
mailto:tinfo@city.takashima.shiga.jp

大溝城と水口岡山城

天下統一の拠点と対岸の水城

大溝城は、天下統一を目指す織田信長が安土城を築いたとき、その対岸にあたる高島郡支配の拠点として、天正6年（1578年）

に甥の織田信澄によって築城された城です。設計は、明智光秀と伝えられ、乙女ヶ池に隣接して造られていることから、内湖を巧みに利用した「水城」であったことがうかがえます。一方、水口岡山城は、甲賀市水口町に所在する古城山（大岡山）一帯に位置する城跡です。天正13年（1585年）に豊臣秀吉の家臣である中村一氏によって築かれ、慶長5年（1600年）まで存在したとされる城跡です。

対岸を結ぶ瓦

この遠く離れた水口岡山城と大溝城を結びつける資料として、『西

川家文書』とよばれる古文書が存在します。この古文書には、大溝城の天守を解体して、その部材を水口へ運び、水口岡山城に利用することが記載されています。

実際、水口岡山城の発掘調査では大溝城と同じ軒丸瓦が出土していることから、大溝城の部材が水口まで運ばれ使用されていたのは確かでしょう。

移築年代の謎にせまる

この部材が運ばれた年代については、水口岡山城が築城された年である天正13年（1585年）、もしくは別の古文書の記述から慶長8年（1603年）と考えられてきました。しかし、天正13年では大溝城に京極高次らが歴代城主として存在しており、城主が居りながら天守が解体されることとなつてしまいます。また、慶長8年では水口岡山城が既に廃城に

なつた後であることから、廃城した城に部材を運び利用したこととなつてしまいます。いずれの年代も矛盾することから、正確な移築年代は謎となっていました。



大溝城出土軒丸瓦



水口岡山城出土軒丸瓦

今年9月27日に甲賀市で開催された水口岡山城フォーラムでは、この移築年代について検討が行われ、先の『西川家文書』は文禄4年（1595年）以降の、水口岡山城3代目城主である長束正家（1595年～1600年）の時に記述された可能性が新たに指摘されました。

このことは、大溝城の部材は、長束正家が水口岡山城の城主であった1595年以降に運ばれたことになり、大溝城の変遷を考えると新たな研究成果として注目されます。また、今回の研究成果

は、これまでの定説が、新たな発見や研究成果により、見直しされる可能性を秘めていることを物語っているのではないのでしょうか。

図文化財課

図(32) 4467

編集感

「スポーツの秋」ということで市内ではさまざまなスポーツ大会が開催され、取材で野球大会やサッカー大会、運動会などへ行ってきました。勝負事なのでとても熱気がありましたが、特にスポ少の大会では、大声で応援するコーチや保護者ら大人の熱に圧倒されました。子どもも一生懸命ですが、大人も一生懸命です。この熱さがいいですね。このような環境だと子どもはたくましく育っていくのではないかと思います。私も子どものときに入っておけばよかったな～。(S)



広報たかしま

平成27年

11

月号
No.190

発行▼高島市 編集▼政策部秘書広報課
TEL:0740-1-0000 滋賀県高島市新旭町北畑5-6-10 番地

☎0740(25) 8000(代)
http://www.city.takashima.lg.jp
mailto:t-info@city.takashima.lg.jp

